

土 淨

昭和十年五月二十日 第三種郵便物認可 (毎月一回一日発行)
 昭和二十四年四月二十八日 省 (特別授受承認雜誌) 第三五二号
 昭和四十六年五月二十五日 省 (昭和四十六年六月一日発行)



第三十七卷

第六号

1971

6

六 月 号



一 目 次

表紙「ジブシー」松涛達文画

日野の朝露……………鈴木 霊 海……（2）

第一特集 医学と仏教

経典にみる医療法……………杉 田 暉 道……（4）

精神医学と仏教……………佐 竹 隆 三……（7）

第二特集 青年と仏教(第二回)

広さと深みのある仏教へ……………杉 谷 義 純……（11）

ボーイスカウト教育と仏教……………牧 達 雄……（14）

昭和法然上人伝(6) 東大寺三部経講説・九条兼実の帰依……………（18）

浄土歳時記《水無月の巻》……………若 林 隆 光……（20）

カンボジアの旅(上)……………佐 藤 治 子……（22）

菩提樹……………中 村 昌 治……（27）

「道」百万遍への道……………高 橋 良 和……（29）

浄土宗の古刹をたずねて② 三河大樹寺と多宝塔…佐々木 洋 之……（32）

語和声念



—— 推尾先生の念仏往生 ——

去る五月二十五日に、推尾弁匡先生の本葬儀が行われた。先生と申上げたが、法主大僧正と申上げるべきであるが、私共には「先生」がすでに半世紀にわたつての呼称であつたし、増上寺の法主となられて以後も、御会いするときは、そのように申上げていた。

私共は幸福であつたといえる。明治大正昭和にかけて、仏教学界を代表される巨匠ともいふべき、渡辺海旭・望月信享・推尾弁匡・小野玄妙・荻原雲来・矢吹慶輝といった方々から、直接に教示を得ることが出来た。仏教は明治の廃仏の後を受け、キリスト教の流行に堪え、マルクス主義の攻勢に対峙つた時に、これ等巨匠連の活動期があつた。この方達はいふ迄もなく仏教学界に取つても世界的な学人であつて、文字通り不世出の学者であつたが、同時に仏教を近代化し、新たな世代の仏教として理論づけられた人々であつた。また近代化の意味では推尾先生が全く群を抜いて居られた。

推尾先生には、学問的には仏教々典概説や仏教哲学大辞典の諸論文のような珠玉の如き労作があるが、それについてはしばらく措く。先生の半面の活躍は、学問の基礎に立つた仏教思想の正しい表現と布教にあつた。話術や表現法によつてでなく、仏教的人生観、仏教実践の正しい有り方を明らかにし、浄土念仏を仏教の結論とされたことにある。浄土宗徒となつたことの喜びを、念仏の宣布に傾けられた。一年は三百六十五日であるが、先生の大衆に対する講演は、年間七百五十回にも及んだとされるが、その全国にわたる講演の中間に、大正大学や早稲田大学で最高級の講義もされた。若い時代には不眠の読書をされたというし、一度読んだことは頭脳中のカードに記され、それが講壇で体系づけられるのであつて、それで参考資料の引用にも狂いがなかつた。

先生の唱導されたともいふ運動は生きる念仏運動であり、ややもすれば、念仏生活の正統にそれる如く考えられたり、素朴な実践性がうすいと称せられ勝ちであつたが、それは対部的辺見であつた。先生の高唱念仏の迫力に触れない者の妄想といえる。

先生は死を前にして一週間、真弟弁章師の首を抱え、半身不随の腹上に木魚を乗せ、右手でそれを叩き乍ら、不断念仏を続けられ、手が動かなくなり、声が止むと共に往生の素懷をとげられた。この死に近づかれるに先立つ頃は、一切経の中の最尊としての浄土三部経の意義を語り、三部経の要諦を真弟に伝えられたとのことである。この学僧の称名往生は、我等これを伝えて後世に残さねばなるまい。

(佐藤 密雄)



日野の朝露



鈴木 靈海

(群馬県大光院貫主)

明治二十九年六月総本山知恩院門跡日野靈瑞上人の葬儀は古來無き所と言われる盛儀であつたという。歳月疾く流れて既に今を去ること遠く、上人の徳を伝える者又少きを歎き、當時本山より印施された漆間徳成師作「大僧正日野靈瑞上人伝」(内題日野の朝露)をひいて御遺徳の一端を記して見たい。

上人は知恩院中興の主で、学徳兼ね備えた名僧である上に、書画をよくし、詩歌に秀で、茶華道の奥儀を極め、筆をたしなみ、行くとして可ならざるなき御方であつたが、余り世に知られぬ御行跡に大般若經書写の事がある。

時恰かも明治維新廢仏毀釈の風吹き荒れる折、上人は時の偉俊行誡日薩等と結んで破邪の智剣をふるい法域を

蔽護されたが、尚覺束なしとて、帝道遐昌仏日増暉の爲にと大般若經六百卷の写経を始められた。人その難きを危ぶみ、且つは「雑善の行思ひ止り玉へ」と諫める者さえあつたが、上人之に答えて、「愚公の名もとより喜びて之を受けん。余が如き罪惡の穢身、護法の為に失はんこと兼々より期する所なり。写経の雑善に至りては知りて然も之をなす。唯これ降魔の恵光を仏に祈り奉る老の微衷なり。出離の要路既に浄業をこととせり。みだりになあやしみそ。」と勇を鼓して写経に勵まれた。福田行誠老和上写経随喜の歌を寄せて、

大光院の教正の老和上の、ちかごろ大般若經写したるが早く三百卷に近づきぬと聞へたるのいとたふとおぼゆるに、よめる長歌并短歌

三縁山老沙門行誠敬上

筆とりて、写す般若か、文字の関

あくる朝に、入り日かげ、くる夕も

石 硯、墨すり流し、紙屋川

かみ改めて、新玉の、年を幾とし

夏冬の、時をいくとき、阿伽の水

汲みてはそゞぎ、さく花を、折ては手向

玉の緒の、あらん限りと、かくばかり

尽す心を、千早ふる、神もあはれみ

三世に余る、我御仏も、うれしとや

みそなはすらん、まほりますらん

かへし歌

同じ世に生れ出でたりおなしくは

おなし心に般若波羅密

後芝増上寺にて五百巻まで書写し、知恩院に住職後、

終に全く六百巻を成功されたのであった。

先師鈴木靈真は上人の嫡弟古畑専靈上人の資で、小僧時代は上人に常随給仕して御愛顧を受け、その因縁で太光院に住し上人の遺物を幾つか蔵するが、その一つに真筆紺紙金泥の阿弥陀経折本がある。一字一礼ともいうべ

き精魂を傾けられた誠に端麗な御筆蹟で、先代以来年一度開山忌法要に拝読させて頂いて居るが、曾て故江藤澈英上人之を拝し長く寺宝として守護されよと感激された更に上人を偲ぶ御筆蹟に日課御名号がある。御巡教の寸暇を見ては記されたもので、その一枚には「第三十五号。明治二十五年於肥前国西松浦郡阿弥陀寺」とあり、半紙に八段六十三行にわたって御名号が書かれてある。大光院には徳川家康公の日課御名号を寺宝として蔵するが、奇しくも両巨星の御名号を拝して、片や陣中、片や巡教中の多忙を押しての勇猛精進相通ずるものあり、まこと儒夫をして立たしむべく、老管長の行持の厳しさ、唯々打たれるばかりである。

上人は此の四年後の明治二十九年五月十三日巡教先の伊勢川口西称寺にて數百人の信徒に剃度式を授与され、獅子座上より「娑婆の名残も今はこれまでぞ」と別れを告げ、同日八十歳を以て遷化された。教家最高の御最期と申すべきである。先に上人を讃仰した江藤澈英上人が同じく巡教先の高座で倒れて往生の素懷をとげられたのも深き因縁と申すべきであらう。上人の盛徳斯くの如し、末裔の名を汚さざらんことを恐れるのみである。

第一特集

医学と仏教

經典にみる医療法

杉田暉道

(横浜市立大学医学部助教
同校医学部附属高等看護学校長)



仏教々典は仏教の教理を説いているものであることは、いうまでもありませんが、その他に仏教が栄えた古代印度の社会、経済状態およびこれから述べようとする医学などについて詳しく知ることができる、重要な文献でもあります。

それは、僧侶達が悟りを得るために集団生活を行なっている過程において、起こってくる日常生活のいろいろな問題につ

いて、どのように考えてどのように処理したらよいかということについても、詳しく述べられているからです。

集団生活をしている僧侶の中で病氣にかかった者が出たときには、どのように治療したらよいかということは、当然起こってくる問題です。さらに病氣をどのように考え、どのように治療するべきかということを知っていることは、集団生

活をしている者にとつては、とくに必要なことです。このよう
な事情から医療行為を修行の方法として、重要視する考え
方も当然生まれてくるわけです。したがって、ここでは仏教
と医学という表題になっていますが、私は仏教的な色彩で当
時の医学をみるというのではなく、仏教の修行者達が医学ま
たは医療をどのように考えて実際に行なっていたかを、でき
るだけ客観的に述べたいと思います。そしてこれが今日の我
々仏教徒のあり方を考える上において幾分かでも役に立てば
幸いです。

先ず、昔から我が国に於いても名医の代名詞程によく使わ
れたという、ギバという人の医療行為について述べたいと思
います。これは四分律という經典に書かれているものです。
ギバの素性はよくなく、ある王族の王子が遊女と遊んだ結果
生まれてきたといわれています。經典にはこの名医による六
種類の治病が述べられています。

第一の治病は今日の灌鼻法に相当するものです。十一年間
頭痛を患って苦しんでいた女の人を、牛乳製品を暖めたもの
を鼻の中に流し、つまっていた鼻汁を牛乳製品と共に口の中
に出して、治しました。第二の治病は、痔の治療です、痔で
出血して大変困っていたある王を、鉄の槽に入れ、中にお湯

をいれて呪文を唱え、王を眠らせてから、お湯を除いて痔を
切開して治しました。第三の治病は、頭痛に悩んでいた人を
酒を沢山飲ませて酔わせておき（一種の麻醉法）、頭を切開
して頭痛の原因となるものを除去しました。第四の治病は腸
捻転の患者を開腹して治した例です。第五の治病は頭痛を酥
（牛乳製品）で治した例です。第六の治病は、釈迦の下痢を
治したものです。この六種類の治療例をみると、当時、脳の
手術や開腹術等の外科的治療法が相当に進んでいたことがわ
かります。そしてその進歩の程度はわれわれの想像以上だっ
たことがうかがわれます。

病気の種類について、どのように考えていたでしょう。か。
これは摩訶僧祇律という經典に書かれております。病には四
百四種類の病気がある。すなわち風病に百一種類、火病に百
一種類、水病に百一種類、雑病に百一種類あるというので
す。そして風病には油脂類を、火病には酥を、水病には蜜
を、雑病には上記の三種の薬物をそれぞれ用いて治療せよ
とあります。このような病気の分け方は、われわれの体は地
水火風の四元素から成っている考え方が基礎になっ
ています。したがってこれらの四元素の均衡がくずれるとそれぞ
れの病気になると考えたわけですね。

治療薬については、時薬、夜分薬、七日薬および尽寿薬の四種類に分けて説明しております。時薬とは午前中に服用すべきもので、一切の根、一切の穀物および肉類を挙げています。根とは芋根、葱根、治毒草根および大根などの根類、穀物とは稲、小麦、大豆、小豆、豌豆、粟、きびなど十七種類を指しています。また肉類とは鮮類および陸棲動物を指します。夜分薬とは午後六時から十時までの間に飲むことができます。飲料水で十四種類挙げております。

古代印度では修行者は一般に食物として、固形物は午前中だけとり、午後は流動食しかとらないという習慣が、行なわれていたことは、經典のあらゆる所に出ていますが、その日常生活に於いて口の中に入れるすべてのものを、薬物として尊重していたことが、この記載によってはっきりとわかります。ついで七日薬とは病氣にかかった時七日間蓄えることができるもので、酥、蜜、油、石蜜、脂、生酥などをあげております。酥には牛酥、らくだ酥、水牛酥などがあり、今日でいえば動物の乳製品すなわちチーズに相当すると思われるます。蜜には黄蜂蜜、黒蜂蜜などの種類があり、油は胡麻油、大麻油などを、石蜜とは現在の砂糖類をそれぞれ指しています。脂には鮮脂、熊脂、猪脂などがあり、生酥とは酪の上部

に凝結するもので、酥より栄養価は高いものです。以上からわかるように、七日薬には栄養価が非常に高く、しかも保存にたえられるものを選んでいただくことがわかります。尽寿薬とは一名終身薬ともいい、一生蓄えておくことの出来るものです。これには訶梨勒、阿摩勒、こしょうおよびしょうがを挙げております。今日の医学からいえば刺激剤に相当するものと思われれます。これが治療薬についてのあらましです。以上述べたことから治療薬とはいっているものの、今日から考えれば食品として扱えるものを、利用方法から四種類に分けているのです。その根底には、先に述べたように、地水火風の四元素のバランスがくずれるために病氣にかかるという思想が流れているのです。したがってそのバランスを正常に戻す方法として前述の治療薬が現われたわけで、その思考方法は極めて合理的なものがあります。

現代における多くの病氣の原因を考えてみますと、いわゆるストレスによるものが急激に増加しております。さらに体の変調というものを重要視して病氣の原因を探ろうという人も多く現われてきました。しかし、このような考え方は、既に仏教時代にあったことは、今まで述べてきたことから明らかにになったと思います。さらに食品を治療薬として合理的な

利用方法を行なっていたことなども大いに学ぶべきものがあります。ここに述べた内容は經典に書かれている中のごく一部分ですが、これらの医学が印度の一般民衆とくに下層階級にまで浸透していたかどうかということになると疑問です。それは、仏教の発展および変革をみればわかると思います。

仏教は古代印度のバラモン宗教の支配下からぬけ出そうとする新しい考えを持った人々の絶大な支援によって栄えました。しかし、因習的なバラモン宗教を信仰しているすべての人々までも完全に教化することはできませんでした。むしろ仏教がさらに根を下すためには、バラモン宗教の持つ神秘性



最初に私に与えられた課題は「精神衛生と仏教」というこ

精神医学 と 仏 教

(大正大学教授・カウン
セリング研究所主任)

佐 竹 隆 三

とでありましたが、ご承知のように精神衛生ということ

をその中にとりいれる必要があったのです。そして一般民衆はバラモン宗教によって日々の生活を送っていたのです。また印度人は古来より物を科学的に客観的に認識する思考方法は得意でないといわれています。これもバラモン宗教が根強く残り、反対に仏教は後世においては密教という形で栄えるようになった大きな原因と考えられます。このような仏教の歴史をみると、仏教思想の根底にあるものは、科学的なものの見方というものが大きな比重を占めていたといえます。う。われわれ仏教徒はこの点をもう一度よく考えてみる必要があるのではないのでしょうか。

「学」として論すべき性質のものではなくて、現実の「実践」を離れては成立し得ないものと考えます。また、仏教——宗教一般もそうでありましょう——も「教」よりは「行」が優先し、その根底には不動の「信」が確立されていなければならぬと思います。現在の私の日常生活を内省するまでもなく、精神衛生の実践とも仏教の行ともかわり合ひのない私にとっては、前述の課題を論ずる資格はないと考え、お許しを得て、「精神医学と仏教」という題に変更させて頂き、この小文をしたためた次第であります。このことは重要なことでありまし、また無用の誤解や混乱を避けるためにも必要であると考え、はじめにおことわりして置きます。

さて、「精神医学と仏教」について論ずるにしましても、精神医学に精通しているわけでもなく、まして仏教に対する理解となると甚だ心もとない次第で、広い視野に立つて全般的に論ずることは、とうてい私にはできそうにありません。また、極端な枚数制限のあるこのような小文では不可能でもあります。そこで、私は「人間とは何か」、「人間性」(Menschlichkeit)をどう考えるかという問題に焦点をあてて、ささやかな考察をし、ご批判を得たいと考えたのであります。

人間とは「常に途上にある存在」(Stets-aufwegs Sein)である——とはわが師 Lipot Szondi の言葉であります。十二年前のチューリッヒでのソンデイ博士との邂逅は、私の人生に決定的な転回を与えるまさに運命的な出来事でありました。仏教的表現に従えば、不思議な機縁と言うほかないであります。彼の「運命分析」(Schicksalanalyse)という新しい学説はかなり難解・深遠なものでありますが、現在の私の人間理解のすべては、彼から学んだものであります。

人間存在の特殊性は、生物学的観点から見ると、(一)人間の誕生時の状態は一種の生理的な早産であるということ、(二)人間の発育期間が他の動物に比較して著しく長いこと、したがって(三)人間と動物における本能体制には著しい相違があること(下等動物は完全な本能、高等動物は不完全な本能と知覚意識、人間は最も不完全な本能とも言うべき衝動、知覚意識、および願望意識ないし欲求意識がそれぞれ賦与されている)などによって規定されております。したがって、人は人間として生まれるのではなくて、人間になる可能性をもつ存在としてこの世に生を享け、次第に人間になるうとするプロセスの道を歩みつけると言った方が妥当であります。前

述の生理的早産と発育期間の延長という比較解剖生理学的特徴を人間がもっているという事実は何を物語るかと言いますと、人間存在の本質的なもの、つまり人間性は、単に遺伝されたものの展開や発展ということに尽きるのではなくて、人間に特有な文化や社会の中で、人間に特有な言語を媒介にして、人間に特有な学習の仕方次第に人間となつてゆくことを意味していると思います。したがって、次第に人間らしく形成されてゆくであらうけれども、人間になったという確信にみちた到達点、つまり人間としての完成に至ることは難しく、死ぬまで人間になろうとする意志をもち続け、努力しなければならぬのではないのでしょうか。

個人としての人間形成 (Menschwerdung) もそうでありますが、人間の歴史もまた、系統発生的には、個性化と自由とが成長してゆく過程として、特徴づけることができると思います。人間は、強制的な動物的な本能から一步自由になることによって、人間以前の段階から脱出することができであります。人間の自然への適応は、本質的には、学習過程にあると思われれます。

誕生時の人間存在は、あらゆる生物のなかで最も不完全な弱い存在であります。この人間の無力さこそ、一切の人間の

発展の生まれてくる根底であり、人間の生物学的弱さ、不完全さ、未完結性が、人間文化の条件であります。人間の存在は、絶え間のない、避けがたい不均衡の状態であり、人間というものは自分で生きなければならぬし、おのれの存在の矛盾やおのれの内なる闇を見つめる存在であります。このような深い絶望の淵からユートピアへの憧憬が生ずるものと考ええますと、私には浄土思想を抵抗なく受容することができると思います。人間とは、自分にとって、自己自身の存在が自分で解かねばならない問題であり、その問題から逃れることのできない唯一の動物であると言えましょう。

人間とはいかなる性質の生きものであるかという問いに対して、精神医学における答を次に示すような三つを代表として挙げることもできるかと考えます。

「人間とは快楽を求める存在である」(Sigmund Freud)、「人間とは権力を求める存在である」(Alfred Adler)、「人間とは生存の意義を自らに問う存在である」(Viktor E. Frankl)——この三人三様の答は、それぞれ深い意味をもち、人間性の本質にふれる真実を物語っていると思われれますが、それらを貫く一本の糸として、「人間とは常に途上にある存在である」(Lipót Szondi)という人間存在の本質にお

ける未完結性を付け加えることによって、ほぼ精神医学的人間像が描かれたと考えます。

禪の世界には「悟り」という用語があり、そのことから容易に理解されることでありますが、「完了した境地」を目標としているように思われます。しかしながら、念仏の世界は、「救い」ということが言われるように、「未完了のままの世界」において救われて、(受動形であることに注意) ゆくのであります。禪にはエリート意識というか、貴族性のニュアンスのようなものがつきまとい、私は積極的に好きにはなれないのであります。法然・親鸞の系譜の思想の中心にある「常に自己に即して道を求め」、「末法を時運の責任に帰することなく、自己の機の上において捉へ」、そして「そこに救われたい己れを発見し」、「ただ念仏のほかはない」という態度決定(選択)をするというプロセスは、ソンデイ心理学の選択理論から考えても、私には親しみやすく、ごく自然に納得されるのであります。

フロイトは、抑圧された衝動は文化的に価値のある努力に変わり、こうして文化の人間的基盤となると説き、この変化を彼は「昇華」と呼んだのでありますが、これは間違ひであります。文化への欲求そのものが衝動として人間に内在する

(自我衝動)と考えるソンデイの見解が正しいと思います。ソンデイの衝動学説は、いろいろな点で仏教の思想に親近性をもっているように思われます。

人間の暗い阿頼耶識が業(ごう)につきまといわれている、人間はどんなことがあってもその業の暗いかげを免れることはできないという一種のベシズムを一方では仏教は発展させたのであります。が、「大乘起信論」では、人間は業を受け継いでいるけれども、同時に仏の心をも受け継いでいる、むしろその方が本当であるといういわば明るい生命の思想のようなものを主張しているのと規を一にしているようであります。

人間存在における矛盾、二重構造は、人間をしてすでに歩み始めた道を進ませる原動力のようなものであり、人間はすでに永遠のさすらい人であります。彼は神と動物との間の中間者であるというよりは、彼の心の中で悪魔と天使とが常に格闘している(ドストエーフスキー)と表現した方が妥当であります。本当の意味での人間の墮落とは、人間の自己自身からの分離であり、権力への屈服であり、たとえ神仏に拝に仮託したとしても、人間が自己自身に叛くことであり、人間となることへの努力を抛棄し、「常に途上にある存在」という自覚を失った時であります。

第二特集

青年と仏教

《第二回》



広さと深みのある仏教へ

杉谷義純

(前全日本仏教青年会理事長)

我々青年にとって、仏教とは何かを問う前に一般の仏教に対するイメージをまず問わねばなるまい。一般に仏教というと何を連想するであろう。これは何も青年に限ったことではないが、たいがいは「お寺」であり「お坊さん」である。そしてそれに関するイメージとしては「とっつきにくいもの」「しんどいもの」「ユーモラスなもの」「葬式」「お経」等があつて「すつきりするもの」「楽しいもの」「解放感」等はどうも挙がりにくいので

ある。

ところで浄土宗や天台宗等では、中学生を中心とする青少年の本山研修参拝を実施して、知恩院や比叡山で何日かのレクレーション的要素を含んだ修行をさせている。修行といつてもいたつて気楽なものであるが、皆なかなかどうしてキチンとしてやっている。大真面目なのである。そして何となく心が引き締まるという感想を抱く者が圧倒的に多い。街へ帰ればガキ大将やいたずらっ

子の彼らである。

さてこの年代から三十位までの人々は特に「教義」とか「修行」だとかいうとげんげ顔をするものであるが、実際にこうしてお寺へ来て簡単な修行でもしてみると真面目に良くやってくれるものなのだ。新入社員を禅寺で訓練させる会社もあるが、禅などといわれて変な顔をしていた男が、警策で肩をビシッとやられると、背をビンとのばして「ありがとうございます」などと礼をするから不思議なものだ。また仏教音楽の声明などの公演が行われると、聞きに行くのは若い人達だ。そして彼等の多くは仏教活動をしている人ではなく、オペラやジャズを楽しむのと同じく声明を楽しんでゆく。しかし、婦りがけには「左側のお坊さんステキね」などとは云わない。「来てよかったわね」というのが多い。

今まで述べてきたことに共通していることとして問題にしなければならないのは、それぞれ仏教の糸口に触れて「何となく良かった」という感じを得ることであり、そこには、「葬式」や「法事」のイメージ、いわゆる檀家的イメージが全くないということである。仏教の糸口に触れてすっきりした人々も、檀家として登場すると仏

教はしんどくなってしまうのだ。いいかえれば、いわゆる「葬式仏教」は「すっきり仏教」ではないのである。

だから在家の青年が「私、仏教青年活動をしています。」等というとき、変った人だと面白そうな妙な目でみられるのは、言う方は「すっきり仏教」で、みる側は「葬式仏教」という尺度でものをみているからなのである。それでは、この「すっきり」と「しんどい」の二つの仏教は、青年の内面において結びつくことができないものだろうか。

青年にとって憧れの強いものは「美」であり、又それに対する「邂逅」と「別離」の情であろう。この辺の話は亀井勝一郎氏がよく述べられたことであるが、氏はそうした青年の心理、就中不安定な心を良く知っていたのであろう。何か「すっきりする」これは「何物か」と心の出会いをするところにおこる感情であり、不安定な心理に何らかの形で支えを得ることを意味している。失恋の激情で尼寺へ飛び込んでしまった、というような例は別として、仏教青年会で活躍している一般在家の仲間などは、多かれ少なかれ、この「心の邂逅」に興味をもつか、又その経験のある者で占められている。

「仏教における邂逅」とは何か。それは「仏との出会い」のことであろう。ただ観光のために奈良・京都の古寺を巡ったり、面白半分に座禅をやったりした時でも、例えば修学旅行生などの、ことに女子学生等は薬師寺にひどく魅了されるらしい。管長の高田好胤師の話が面白いからでもあるが、やはりあの東塔の構成美と薬師三尊の美しさにひかれるからであろう。私自身、塔は大好きである。

東京タワーや、京都タワー等には手がたが、三重塔、五重塔、あの一層ごとに屋根のある、一見無駄ともいえる建築であるが、頂上の水煙を仰ぐ時に味わう快よい気分は何とも云えないものである。塔との語いにしほしを忘れるのは何も私だけではあるまい。ところがいくら東京タワーのアンテナなどふりあおいでも少しも面白くないし、すっきりもしない。それはおそらく、あの水煙のセミの羽根をひろげたような、何ともいえぬ「広さ」がそこないからだ。古塔はたびたび私たちにそうした「広さ」を教えてくれる。そして仏像は同じく「広さ」を教え、そのたたえる微笑がいい知れぬ「深み」へと私たちを導いてくれるのである。

現代のようにのっぺりとしたビル街や、せせこましい街中にいるとき、小さな公園でもあるとほっとしたような気がしたことがあるであろう。あの心が、塔を、仏像を仰ぐ時の「心の広さ」ともつながるのであるまいか。この「広さ」を味わえること、これが仏教における「仏との出会い」であると私は考える。不安定になりがちな青年の心に一種の「広さ」を感じさせるもの、仏とはそういうものであるはずだ。

だから青年の仏教活動において重要なことは、何も形式的に写経をしたり、お経を読んだり、にわか信者になつたりすることではない。又法事等にかしこまって坐っていることではないのである。むしろ例え一片の経文すら知らなくてもよい。日本の仏教宗派の名を一つも知らなくとも良い。寺院建築において、仏像において、声明において、座禅において、「仏に会える喜び」を何となく「良かった」という感じで受けとめることが第一歩であり、それをもたらずのが邂逅であり、解脱に通じるのである。だからここではまだまだ「しんどい仏教」は顔を出さなくてよいのである。むしろ一つの出合いからそれを深めていく過程において、写経があり、読経があ

り、又故人の追善供養があるのでなければならぬ。ここに「すっきり仏教」と「しんどい仏教」のかけ橋があるのではないだろうか。

青年にとって仏教は必要か等とよく言われるのを耳にするとき、それは仏教の教理を抽出して青年等が直接自分と二重写しにしようとするから、そんな質問がでるのではないだろうか。青年が生きる喜びを、人間としての悲しみを知らうとするならば、おのずから仏教はそこにあるものである。だからしかつめらしく考えるよりむしろ、先に述べた「仏との邂逅」によって充分快感を味わ

えたなら、仏教は彼にとって必要なものとなったと考えるべきであろう。

仏教を志向する青年の会が「広さ」と「深み」を味わえる会になった時、そこには根源的な問いかけと、未来を展望した行動が生まれ、「すっきり仏教」と「しんどい仏教」を止揚する新仏教誕生の契機があるように思われる。仏教は常住であり、それを受け入れる人間が、逆にそれを規定していることを考える時、青年が自からの手で自分の仏教を選びだすことに何の不思議があるうか。仏教の前途は明かるい。

ボーイスカウト教育と仏教

牧 達 雄

(仏教大学講師)



山に登り、海に遊び、キャンプをしたりハイキングに行く等、自然を求めている青少年の野外活動は日増しに盛

んになって行くようです。しかし悲しいことに追い求めている自然は、毎日に破壊され失われてゆきます。

山紫水明の日本は、今日まで自然の豊かさにめぐまれすぎておりました。私たちの祖先はこの美しい自然の豊かさの中で、自然と人間の心との調和の上に、美しく豊かな文化を培ってきたのでした。ところが明治以後のわが国教育はあまりにも科学を偏重して自然の恵みに感謝し、心を豊かにすることを忘れていたようです。その結果が自然の破壊となつてまいりました。そして人間の心までが荒れはてすさんでしまいました。

ボーイスカウトの教育は自然を道場とし、自然を師とし、自然を友として道を求めるのであります。その根底には数けんな宗教信仰があります。ことに自然の中での生活態度には、仏道より学ぶことが実に多いのであります。自然尊重の心を、仏道を通し、スカウト教育の場において、日本人の心にとりもどさなくてはならないと痛感いたします。スカウト教育は自然と人間とのふれ合いの中に開かれてゆきます。それは人間が自然の上に刻してゆく道であり、足跡であります。それを美しく豊かなものにして行くのがスカウト教育なのであります。その一端をここに紹介したいと思ひます。

あるキャンプでのことです。おそらくボーイスカウトに入つたばかりの少年が、何気なく水汲場で炊事の準備をしたのでしよう。澄みきつた流れの底に少量の真白い米粒が沈んでいました。隊長は朝の点検でそれに目をとめました。早速隊長は朝礼で次の様に少年たちに語りかけました。

「スカウト諸君、お米は人間が食べるものです。うつくしいものです、その美しいお米が谷川の水に流されていくのを美しいと思ひますか？ 流れに沈んでいる枯葉は食べられるものではありません。それが清流に浮んでいても決して不潔には感じません。何故でしょうか？ この谷川のせせらぎに尋ねてごらん……。」

こんな例は数限りないのです。一木一草にいたるまでが生きた教材なのです。

キャンプ地を去る時のスカウトたちの合言葉は「ただ感謝のみを残して去る。」ということ。不思議なもので、自然の中に落されたどんなに小さな紙片でも、マッチの軸一本までが不自然に目立つのです。ですからキャンプ地を去る時には何ものも残さないのです。できる限り原形に復します。そして一日一夜の御恩を自然に感謝

し、合掌を捧げてその地を去ります。少年達の残した足跡も、やがて美しい緑の芝生の中に包み消されてゆくことでしょう。

時には自然は峻厳なまでに少年達をきたえます。雨にたたかれ、風にもまれてスカウトは成長します。一夜にして泥水の中にテントが孤立し、ねぐらを失うことがあります。また夜半の嵐に補強を怠ったテントが吹き飛ばされてしまうこともあります。薪木が雨にぬれて炊事が不可能になるようなこともあります。少しの油断も許されないのです。しかし嵐のあとの自然には、嵐に耐えたものだけが知りうるすがすがしさがあります。すみきった空気の中に草木がよみがえります。こんな時、仏教讃歌の、

みほとけは おごそかに さしたもう

たくまשיき心は あらしにもたえてこそ
が口ずさまれてきます。

道ははてしなく続きます。キャンプ生活の基本は、食べること、寝ること、そして排泄の三が快適であることだと思います。その上にはじめて目醒めの生活、さまざま

まの活動がなりたちます。日常当然のこのように何気なく繰り返されるこれらのことが、キャンプ生活では一番大切なことになり、あらためてその意義が自覚されてまいります。一宿一飯の中に天地が恵みが秘められていることを、じかに天地から教えられるのです。感謝の生活ということが、平常の生活や、布教、教育の場において、ともすれば観念的に受けとられてしまいがちなのに、スカウトの教室、キャンプの道場では、じかに体感されるのであります。この上に立ってスカウト教育はどこまでも広げられてゆきます。ロープの使い方、救急法信号、測量等生活上の必要技能の習得、ごく自由な立場からの奉仕活動、国際親善とその活動の範囲が拡大します。

広がるばかりではありません。道は深められるものです。キャンプ生活ひとつについても、毎日毎日が改善の連続であります。「日々に新たに日に新たななり」です。スカウトの道も、仏道と同じく生涯をかけて、いな死後もなお深められなくてはならないものです。それを日々の点検、反省、改善の中に実践するのであります。次の歌はそのまゝ仏道ともいえるようです。

「永表のスカウト」

- 1 ひとたびスカウトに、ちかいをたてて
なりし身は、いつもいつもスカウトだ
- 2 ひとたびスカウトに、ちかいをたてて
なりし身は、今の今も スカウトだ
- 3 ひとたびスカウトに、ちかいをたてて
なりし身は、死ぬ時までスカウトだ

4 此の世のスカウトに、いのちささげて
つかえなば、死してのちもスカウトだ

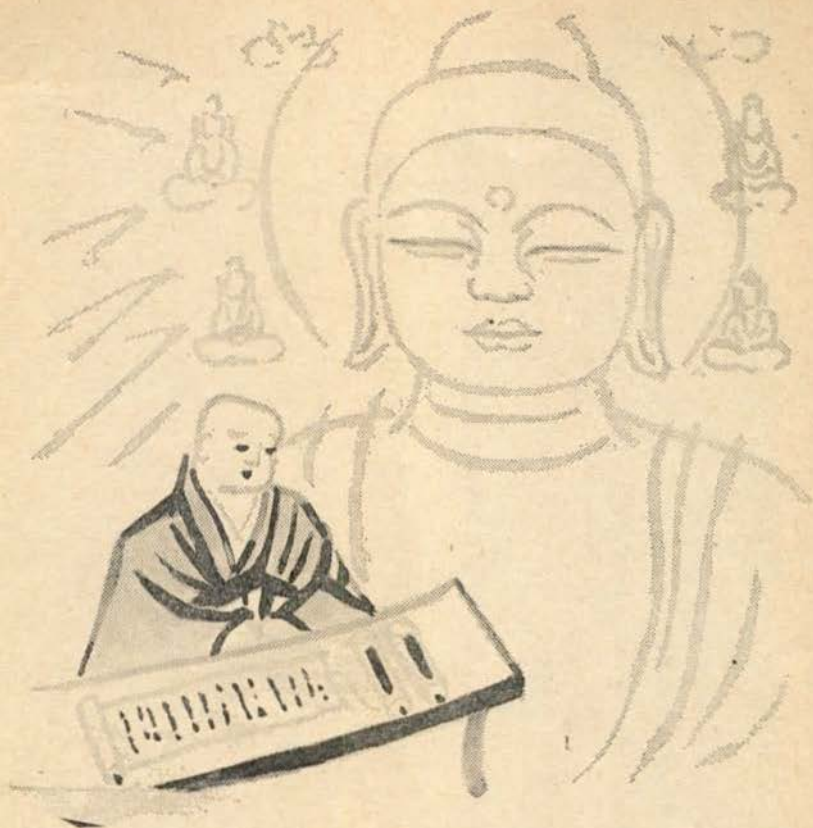
このようなスカウトの教育方法は、イギリスのペーテ
ンパウエル卿（一八五七～一九四一）によって、一九〇
七年に創唱されました。わが国には明治の晩年に紹介さ
れ、大正十一年に日本連盟が組織されました。戦争中は
中断しましたが、一九五〇年に国際復帰をしておりま
す。その間幾多の先人が道を開拓して下さいました。そ
れを私たちは大変ありがたく思うのですが、仏教スカウ
トは、さらにすすんで祖師方を、この道の先人として
仰いでおります。

スカウト教育の方法には、前述の野外活動のほかに、
少年の発達段階に応じて、一定の人員による有機体活動

を促進する班制度と、初級スカウトから二級、一級、菊、
準、富士と進級してゆく進級制度、そして個々のスカウ
トの個性や能力を開発しようとする技能章制度の三本柱
があります。そしてもっと大切なこととして、三つのち
かい、十二のおきての実践が基本的なスカウト精神とし
て定められるのです。このスカウト精神のよりどころが
信仰なのです。すなわちちかいの第一に、「仏と国とに
誠をつくしおきてを守ります」とあるのがそれでありま
す。これにもとづいて、全てのスカウトが明確な信仰を
もつことが望まれています。そしてその信仰を求める態
度が定められた基準に達した時、宗教章（仏教章、キリ
スト教章、神道章）がスカウトの胸に飾られます。

私はスカウトの道は仏道であると思います。仏教信仰
なくして、真のスカウトの道は究められないと思いま
す。

全てのスカウトが明確なる信仰をもちうるように寺院
住職方のお力添えをお願いしたいと思います。スカウチ
ングは少年にとっては、この上なく楽しい、そして国家
会社にとっては、この上なく頼もしい、そして宗教家にと
っては、この上なく有効な青少年教育であるといえます。



東大寺三部経講説<11>

治承四年（一一八〇）暮の十二月、平重衡は火を放って東大寺や興福寺を焼き払った。翌年東大寺の再建のため、法然上人に勧進職が与えられようとしたが、上人は器でないことを理由に辞退し、同行の俊乗房重源を推挙したという。建久二年（一一九一）、復興のできた東大寺の大仏殿で、上人は「観経曼荼羅」を供養し、浄土三部経を講じられた。このとき講本とされた『三部経釈』は、上人の大切な著作で、『選択集』の草本となった。浄土教のありがたさが具体的に再度公開された記念すべき行事であった。



九条兼実の帰依<12>

九条兼実とは藤原忠通の三男で、文治二年（一一八六）源頼朝の信任をえて摂政になり、建久三年（一一九二）関白となった。まもなく法然上人に帰依して浄土の教えを聞き、関白となった建久三年（一一九二）ごろには、しきりに授戒をされ、密接な関係をもつようになった。ところが兼実が院政を押えて自分の勢力を拡大しようとしたことから失脚し、晩年、政治的には寂しい思いをしたが、念仏に対する信仰は深まっていた。専修念仏が貴族の間に広まった点で、兼実の残した功績は誠に大きいものがある。

浄土歳時記

《水無月の巻》



(二松学舎大学講師)

若 林 隆 光

往生とは生きているうちに出来るのでしょうか、死んでからするのでしょいか。

こぶし、椿、れんぎょう、木蓮、藤、つつじと咲き続けて来た花も、猫の額のわが庭では、六月になると一息ついてしまう。藤棚といえはきこえはよいが、丈たらずの塀のおぎないに、眼かくしをかねて堅にはいまわせた藤垣のところで、こゝろに見えていた隙間も、短い花房のちりはてると共に、いつかすっかりふさがって、暑い夏のはだかもお互に遠慮の少い木の葉越しの体制をととのえてくれる。

そんな夕方、親友のH君が亡くなった。

前から少し加減が悪いとはきいていたが、僕の生命はもう

十年だよといひ暮していたH君を、お前がそういい出してからもう十何年もたったぞ、十年とは一体いつからいつまでかなどとからかっていた仲では、午後四時四十分急に亡くなりましたと電話でいわれても、本気には出来なかった。すぐかけつけて見ると、設計から材料まで、全部自分で担当して、縁つづきの大工さんにじっくり造らせた新しい座敷に、顔色の悪かった平常よりむしろよい様子で寝ている。枕もとには茫然たる夫人と、何もわからない親類の幼児が三人口をきかないオジチャマを見ている。寒がりやだったH君らしく、厚い毛布にくるまったH君の手を握ると、まだあたたかく、やわらかい。これが死ぬということだろうか。さりとてあまりにあっけないではないか。四五日前に京都行をさそつた時には、用心しているから、このたびは遠慮させて貰うという返事で、お見舞いということをお願いするような気配がそれ程感じられなかったのはこちらが鈍感だったせいだろうか。以前肺の手術をしたときに近付いていた死神はどうやら縁が切れたように見え、その後は小事をゆるかせにしない真面目な気質と相まって、健康にはよく気をつかって、はがしいぐらい冒険的なことはしなかったH君だった。したがって他人の信用もあつく、内外の役職は自ら君に委ねられ、先ず立派な本堂が出来、附属の四階建の会館が完成し、車裡が出

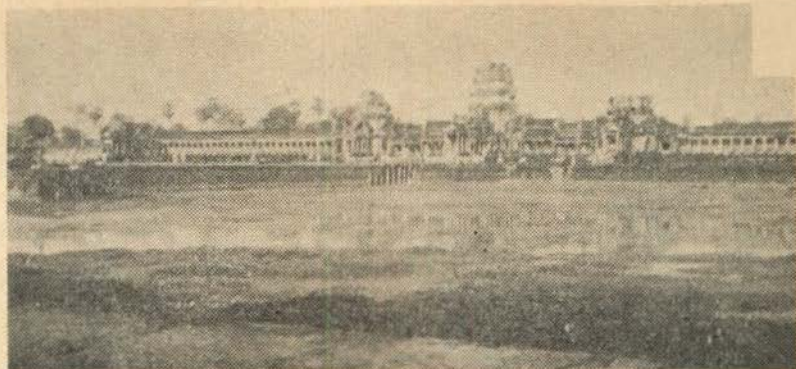
来上って、手直しの新座敷といった処まで手がのびていたのだった。性質がよく、能力も高く、内にも、外にも恵まれていたH君。若し強いて欠けていた処をさがせば、二人のお嬢さんのお元氣なのに引かえ、折角生れた男のお子さんを直ぐ亡くされたことででもあろうか。そのときH君は日ごろは歌などよんだこともないのに「この雨は地にしみ入って亡き子らの、みたまうるおす水とならんか」と、よんで、その悲しい親心に、われわれをもらい泣きさせたが、H君はそんなにも心素直な念仏者でもあったのだ。

そのH君が死んだ。亡くなったというの何かそらぞらしい。亡くなったというのはH君が経って、存在しないことが実感されてからの言葉ではあるまいか。H君は今なくなりつつあるのだ。死んだけれど、まだなくなっていない。握った手のあたたかさの中にも、やわらかさの中にも、われわれの心の中にも、H君はまだ存在している。一番上等な設備でのご家族ものぞみ、われわれも願って火葬にした白骨に燃え残る小さなかげろうを見た今でさえ、H君はまだ胸のうちから消えてはいない。

といってH君が死ぬ前に往生を果していたとは到底思えない。家の方々にも黙って片付けて上げた本堂の片隅には、まだ使うつもりのありありと読みとれる様子で着るもの、かぶ

るものが置かれていた。宗祖のご法語にはこうある。二祖・三祖の御遺文にはこうだという論が世に盛んの様である。お教え頂けることは全く有難く、ご尤もなことで、おっしゃる通りであろう。また生前に極楽往生も出来ず、浄仏国土、成就衆生の行の成る見込みもなく、浄土を莊嚴するといった表現も叶わぬとなれば、人類進歩の希望にもあわず、現代青年をつなぎとめることも出来ないといわれる。これも反対の余地無き正論で、異議をさしはさむのは無理というものである。

だが百歳に垂とする大僧正も亡くなり、五十歳を出たばかりの親友H君を失ってみると、人類にとって進歩とは何かというようなことが思われてならない。古人は年々歳々花相似たり、歳々年々人同じからずといったが、藤も散り、つつじも咲きはてた庭に緑の色のみ色濃い有様をみれば、花が咲くことによって植物の完成が一つの頂点に達するという見方も出来ると共に、花が散ることによって更に完成に近づくようにも思える。花が何に当り、実が何にあたるのかまでをいってしまえば比喩を本体と取違えるあやまちを侵すことにもなり、お説教に墮することになる。往生とは生きているうちに来るものか、死んでするものかを、問いかえすことが答えの一部にもなる。心から君の冥福を祈る。南無阿弥陀仏。



アンコールワット

カンボジアの旅 <上>

佐藤 治 子

—— アンコールワットへ ——

アンコールワット！森の中に眠っていたアンコールワット。どんなに長くあこがれていたことか！特にバキスタンへ行った時、帰途アンコールワットへ立寄る計画をたてていたのに、ラオス国境あたりの状況おだやかならずという理由で中止せざるを得なかった主人は、インド仏蹟参拝の帰途、どうしても行つて来たいと切望していた、この念願がよいよ果せるのだ。パンコックで、私は旅行の疲れをとっておかなくてはと、半日をホテルで休養したのである。

三月六日。ベトナム機でパンコックを午前十一時十五分出発。一時間足らずでカンボジアの首都プノンペン空港に着。空港内で荷物の検問を受ける。そのまま暑い待合室で二時間近くも待たされる。ようやく二時十分出発。エアコンもない小型の飛行機である。

汗が出てくる。窓近く座っている人達が下を見て、ざわざわとしてきた。左側の下の方にアンコールワットらしきものが、樹海の中に見えてきたのだ。すぐ見えなくなったと思うと、下降し始める。そして到着したのがシエムリエブ飛行場である。暑い、そしていたって閑散とした空港である。たの

んであったガイドが来ていないらしい。ブノンベンといい、この空港といい、土地の人達はフランスで感じたと同じに無愛相である。しゃべる言葉もフランス語、言葉の通じないということは、何か壁にぶつかったような感じになる。背の高い青年があわてて入って来た。ガイドさんらしい。紹介されると、中々日本語が達者である。

車は飛行場を左に見て暫く走り、右へと曲がる。行く手にまっすぐにそびえる大木の並木が見える。その遙か向うに、目指すアンコールワットの上が見えてきた。ああ、アンコールワットだ！ 胸がわくわくしてくる。だくだだとアンコールワットが大きく浮びあがってきた。

車は右折、そこに私達の泊るホテルがある。アンコールワット前宿といった具合である。しょうやかなホテル式のホテル。私達の部屋は、今通ってきた並木通りに面しているだけあって、大木の並木のかげで、いかにも涼しそう。一休みして、すぐ見学という。歩きやすいように身軽でいかなければ。

バンコックで何かにあたったらしい主人は、おなかの調子がわるく何も食べていない。私は急いで熱いお湯をもらい、ほうじ茶を作り魔法瓶に入れてもって行くことにする。

ホテルの前には、人力車に似た二人乗りの車の車夫が、あちこちにたむろして客引きに夢中である。

日本に留学したという土地のガイドさんに連れられて出かけた。暗い灰色のアンコールワットは、前庭の池の向うに静もりかえっている。これが長いこと、ジャングルの中に眠っていたものなのだ。池には橋がかかり、アンコールワットの中央の塔門に行かれる参道になっている。道幅は広く、両側の手摺りはナーガ（大蛇）の胴をかたどったもの。所々にテラスのような場所があり、コブラの頭をグッと持ちあげた形をした飾りがある。中々大きなもので、よく見るとコブラの頭の形の中に、大蛇の頭が七つ彫れている。ナーガの鎌首を持ちあげたような形のはインドでも見た。ナーガの信仰はインド周辺から起ったものであろうか。

アンコールワットは、すぐそこにと思ったが、歩いていると中々遠い。時々テラスで一休み。特に半病人の主人はほうじ茶を少しづつ飲みながら、暑さとだるさにまけないようにがんばって歩いている。涼し気な並木にかけ戻りたいほどの暑さだ。ようやくにして左右に長く展がっている石造りの大寺院の中央塔門にたどりつく。

石の柱のかけに入ると、ひんやりとしている左右に長くの

びた回廊の外側は、柱の列が並び、内面は壁になっている。近よると一面の浮彫り。すごいものだなと、思わず一人ごとをいう。つき当って左に折れる。その外廊は木かげになっているせいか暗い。内側の壁を見るとあること、あること、一面に絵が彫られている。幾段かに区切られ、下の一列目から二列目へと物語りのように、一連の意味をもった絵がつづいている。

絵物語りは、インド神話であり、民族の発展史であるマハバラターとか、ラーマヤーナのような史話が浮ぼりになっているということである。美しい姿に彫られている数人の舞姫が、特にかわいい。「足をこらんなさい」といわれる。この舞姫達は正面を向いているのに、足は真横を向いている。おかしい形である。これは足の向きの方に通路があつて、通路への径しるべというわけである。壁面の浮きぼりを順々に見ていたら、何日も日参しなければ見きれものではない。一番外側の、この第一の回廊の内側の壁全体に、彫りの絵は続いているという。

祇園精舎へたどりついたと信じきった、あの森本右近太夫の名前のほつてある所へも案内された。日に限りのある旅程と、夕刻近くでもあったのでゆつくりと見る時間はない。私

達はうす暗い通路をぬけ、明るみへ出る。そこに上へ上る石段がある。一段々が高いい。クメール人は足が長かったのであるうか。やつこらせと登る。そこは二段目の回廊であり内庭に面している。すべてが石造り。組まれた石、置いてある石群の間をぬって歩く。

そこよりは、また一段と急な、そして高い石段があつて、その上がこのアンコールワットの中心である祠堂のある場所である。回廊のかげになったところの大きな石に腰かけ一休み。若い方々は大腿に石段を登っていく。私達は大きな大きな石のかたまりのゴロゴロしている溪谷の一つの石に腰かけているみたいな感じである。

あの上へ登れば、周囲の森林地帯が一望に見えるにちがいない。息切れがしそうで、足がすくんでしまう。運動靴の足の裏がほてっている。あの長い参道といい、この急斜面に石を組んで造った高い石段といい、聖なる祠堂へ簡単には到達できないように造られたにちがいない。しかも自分の在世中に造りあげた、この石の大建築。ガイドさんは、四十キロ離れた山から運び出された石材であるという。ジャングルを切りはらったところから現われ、当時の姿を厳然としてゆるぎない、この大寺院を造った技術と人力に驚くばかりである。

降りてきた方々と中央の廊下を下へ歩く。夕刻前とて通路はうす暗い。ふと見ると仏像が一杯安置されてある。バラモンから仏教へと移った時代に持込んだものらしい。何しろこの国は盛衰変遷の、非常にややっこしい歴史をもっている。

素足の子供達が拓本をもつて「これタクホンよ、たかくないよ」と、私達におしつける。日本語で「タクホンタクホン」と、口々にいうのにはびっくりしてしまった。急速に増えた日本からの観光の人達に教ったのだろうか。

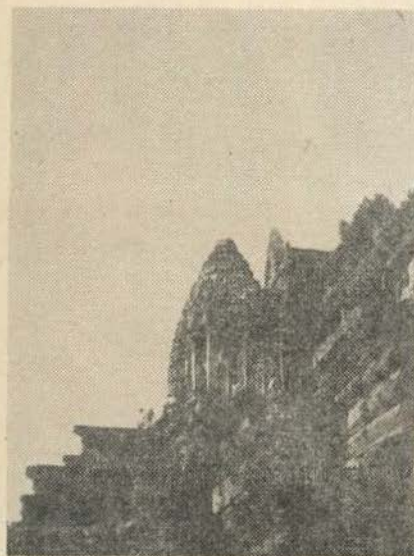
子供達にまつられるので、足早に伽藍の右側の出口から



アンコールワットを背景に

外へ出る。休憩所近くには、車がそこまで回って来て私達を待っていた。休憩所の椅子にかけて一休みの私達に、また押売りの子供達がむらがって、「安いよ、たかくないよ」と、拓本をひけらかしながら、しつこくとりまいている。

夕日に映し出される、この大伽藍を椅子にかけてゆっくり眺めたい。ガランとして、ひっそりと静もりかえるアンコールワットを。草原をかけずり回る押売りの子供にあきらめさせるように、私達は腰をあげ車の方へ歩き出した。車は外道へ出て、池の外側をホテルへ向け走って行く。あんなに暑



第三回廊の中央祠堂

かった参道も、夕日のかげになって涼しうである。

フランス料理

七時の夕食。ベットに横になっている主人の熱を計ると、七度四分ある。私は一人で食堂へいった。私達のテーブルの近くにフランス人のグループが、楽しそうにお酒を飲み、話しをしている。運ばれてくる食事は、実においしい。「このホテルのフランス料理はおいしいですよ」と聞かされてはいものの、実においしい。ビンに入っているミネラルウォーターもテーブルに置いている。しかも代はとらない。久々に味うフランス料理、寝ている主人に軽そうなものを選び、ボーイに手まねで注文する。英語はまったく通じない。舌づつみをうって堪能した夕食であった。

熱湯を入れてもらったおやかを下げ、片方に主人のために用意させてお皿をもち、長い廊下を部屋へ戻った。疲れたとはいえ、アンコールワットへの念願を果せた満足感に浸っていた主人は、フワッと焼いた卵焼きに似た料理とフランスパンに、少し食欲が出てきたようだった。

アンコールトムへ

三月六日。十一世紀に入って建設されたというアンコールワット。シヤムとの戦争で王寺と王城を放棄してから、一八六一年にフランス人によって発見されるまで、七世紀あまりはジャングルの中にひっそりと眠っていた、そのアンコールワットが立木林の向うに見えている。ホテルの庭に出て、昨日あの二段目のテラスまで登ったのだと思うと、感慨無量なものがある。

今日はアンコールトムを拝観するのだ。ホテルの周囲は、未だしーんとしている。目のさめた主人も、今朝は気分がよさそうだ。「先生、寝ていらつしゃい。私達が代りに見てきます」と、ここまで来て具合のよくない主人は、からかわれたりしたことを思えば、今日は大丈夫らしい。

七時三十分朝食。八時十五分マイクロバスへ乗る。アンコールワットを右に見て森の中を進む。左側にある寺院ブキンバイク(ブノムバケンカ)を過ぎてからバスを降る。

見上げるように背の高い門がある。大きな面の彫をした門。「ウァノ大きな顔」と度胆をぬかれてしまった。この大きな面は微笑しているではないか。私も「まあノ」と、微笑してしまふ。右にも面が彫ってあるらしく横顔が見える。

歩きたすとガイドさんが「この両側を見て下さい」という。「まあこれは何？」人の形の石像がずらりと行列してい

る。よく見るとナーガ（大蛇）の胴体が大勢でかかえているのだ。左側は神々。右側は顔をしかめたり、にらんだりしているような阿修羅がずらりと行列して、同じくナーガの胴をかかえているのだ。きりたつような異様な門の形と、大きな顔にまず驚いてしまった私に、この行列が門への橋の両側に並んでいるのが気がつかぬ位、その面の大きい、しかもほのと浮べた笑いに魅せられてしまったのだ。

これがトムの南門だった。門の入口は細く、高い。上部は三角のようにとがり、そして両側にうっそうとしていた樹林の間に青空がのぞいて見えるのだ。神々と阿修羅の行列の中を、そしてほのと笑っている大きな顔の門の中へと私達は歩

菩提樹（ほだいじゅ）

東京、新宿から小田急電鉄、本厚木駅下車、三増（みませ）行のバスで北方へ一〇軒、神奈川県平野郡と山部との接合点、そこに愛川町三増がある。ここは昔、甲州街道の脇街道上の宿場だった。が今は見るからの僻地となっている。戦国末期の永禄十二年（一五六九）十月、甲斐の武田信玄と相模の北条氏康の軍とが激戦を展開した古戦場でもある。

いていく。ここは何ともたのしいものである。空虚さを、そしていささか気味の悪さを感じさせられたアンコールワットと比べ、王城へと入る南門は、何と人間味を感じさせるものであったろう。

トムには五つの門があるという。東西南北、ただし東に勝利の門と死者の門の二つがあるので五つになるわけだ。ジャヤヴァルマン七世がこの王城を建設したが、戦死者の霊がこれから拝観するバイヨン廟へまつられる時、この死者の門から入るといふのだ。トムの王城内で芸術的建築遺跡として一番有名なバイヨン廟。そこへ私達はいくところである。

中村昌治

（神奈川県愛甲郡愛川町在住）

ここに甘露山宝積院―清徳寺（開山珍算・文亀二年（一五〇二）正月十二日卒、現住職足立高敏）というお寺がある。

この大門の左脇にこれから記そうとする菩提樹のみごとな一株がある、筆者はよく北相模のお寺歩きを楽しむがこの樹はあまり見かけない。もつともこの樹はお寺だけしか植えないが珍らしい。何時の代、植えたのかもちろんわからない。この寺は以前は無住がつづ

き荒れほうだいたったが戦後、現住職が入られて内外ともに整備された。

記すまでもない、仏祖釈迦牟尼は二十九歳のとき出家求道のためカピラ城から苦行林にはいつて六年間生命がけの苦行をされた。しかし遂に真実の証りに向かう完全の道ではないことを体験された。

そこで苦行林を後にし、尼連禪河に入つて沐浴、身垢を去り、村娘の供養する牛乳を受けて体力を回復、すんで伽耶のビッバラ樹の下に端座して内観をつづけられ遂に宇宙人生の真理をさとつて正覺の主、仏陀となられた。そのビッバラ樹を後に菩提樹というようになった。

ふつう菩提樹は学名を *Tilia Mique liana* で中国原産のシナノキ科に属する落葉喬木で高さ一五米以上の大木になり枝分れしてよく茂る。小枝には星形の細毛が密生する。葉は短かい柄があつて互生し、ゆがんだ三角状心臟形で長さ六—一〇釐、表面には毛がなく裏面には星形の細毛が密生して灰白色で、ベリに沿つて細鋸歯がある、初夏になると葉腋から集散花序の先きに淡黄色の五弁花をつりさげ一個の狭い舌状形の葉状をともなっている。果実はほぼ球形で直径八釐ばかり、灰かつ色の毛が密生する。ベルリンのウンダンデン、リンデン街の街路樹は洋種菩提樹（ヨウシュボダイジュ・学名 *Tilia platy phyllas*）でヨーロッパの中部から南部にかけて分布している。リンデン・linden とはシナノキ *Tilia* 属の呼び名である。ヨウシュボダイジュの葉はゆがんだ心臟形で長さ六—一二釐先端が急にとがり、ヘリに鋭い鋸歯があり若枝や葉の裏面および柄

に軟毛が密生する。花は芳香があり黄ばんだ白色で六月ごろ狭い舌形の包葉をともなつた長い柄の先にふつう三—六花、まれに四—六花をたれて咲く。日本にはごくまれに植栽されている。近似種のセイヨウシナノキ学名 *Tilia europaea* はヨウシュボダイジュとテイリヤコルダ *Tilia cordata* の雜種で葉の裏面は葉脈にだけ毛がある。これもやはり街路樹に植えられている。

なお釈迦牟尼がその下で菩提を成就し仏となられたといわれる菩提樹は上記のものと全々別種でタワ科に属するインドボダイジュ学名 *Ficus religiosa* のことでわが国では露地では全く育たない。インドボダイジュは覺樹・道樹などともいわれ、それから一般に同種の木の名ともなつた。この木はもとアシュバッタ *Asvattha*（阿説他・あせった）阿輸陀・あしゆた）などと（音写）呼び、その果実をビッバラ *bibbala* 畢鉢羅・畢波羅）といった。ヒンズー教徒もこの木を神聖視し神々のすみかとなした。また釈迦以外の過去・未来の諸仏が考へ出されて来ると、それらにもおのおの異なつた菩提樹ができた。なかでも弥勒仏（みろくぶつ）の菩提樹は竜華樹（りゅうげじゅ）とされている。

シューベルト作曲の歌曲に菩提樹 *Der linden baum* がある。一八二七年作の連作歌曲（冬の旅）の中の第五曲であるが独立してよく歌われる。日本でも古くからしなれてゐる。恋人に捨てられた若者が菩提樹の木蔭にいこいを求める気持をうたったもので、木の葉のそよぎを表わす前奏に誘導されて歌いだされるというふうな民謡めいた旋律が美しい。

道

百万遍への道

高橋 良和

京都に法然水という井戸がある。ところは、京都市上京区相国寺北門前町仲ノ町というところである。

相国寺といえば臨済宗相国寺派の大本山であって、足利義満の建立した寺である。その相国寺の北門であるから、北側であるが、道より一筋目の道路の南側である。

どうしてこのようなところに法然上人に関係ある井戸があるのだろうか。もともとこのあたりは、加茂の神宮寺のあとなのである。

この神宮寺は、相国寺より古いので、もとは、比叡山延暦寺の第三代の座主である、慈覚大師円仁の創建した寺なのである。ところで法然上人は、上加茂、下加茂の両神社を尊崇したので、この神宮寺に住したということである。神宮寺の境内にあったのがこの井戸であり、法然上人はこの井戸の水を汲んで、神宮寺の本尊に献じたといわれている。

この神宮寺はその後荒廃していたところ、臨済宗の相国寺が建てられたので移転することになり、一条の油小路に移り、更に転々として後、今の左京区田中門前町に移ったのが大本山百万遍知恩寺なのである。

それがために寺は移ったけれど、井戸は昔のままに残り、相国寺の山内である松鷲軒の境内にあったが、この寺も廃寺となってしまったので、井戸のみが法然水として今日までつたえられている。であるから、このあたりはまぎれもなく神宮寺の趾であり、また加茂の河原院ともいわれていたところで、四十八巻伝には、「賀茂の河原屋」と呼んでいる。この神宮寺が百万遍となったのは、寛文元年（一六六一）の火事のあとでこの地に再建したのであるらしく、もとは今出川釈迦堂とも称していたらしい。

このときから百万遍が念仏の道場となったので、法然上人の弟子である勢観房源智（せいかんぼうげんち）が法然上人について第二世として、寺法や、本尊など一切を相承しているし、特に書物としても「三昧発得記」などがこの源智に相承させている。

源智は法然上人の弟子としては、四番目になるよううで、第一番の弟子は法蓮房信空であって、信空は、法然上人と同輩で、比叡山とともに修行したが、法然上人の立教開宗後法然を師としてつかえている。第二番目は感西であり、この人は若くして亡くなっている。

第三番目は証空である。証空は西山派の派祖となった人であるだけに、非常に頭のするどい人であつたらしく、善意房証空ともいい、弥天国師の諡号もうけている。

その次が源智であつて、この人は平重盛の五男・師盛の子であるといわれ、法然上人の側にあつて給仕すること、十八年の長きにわたっている。十三歳のときに法然上人のもとに弟子入りし、上人門下としては、上人から最大の好遇をうけている人である。

然しそのなかでも一ばん大切なことは、一枚起請文を法然上人からいただいたことであつて、四十八巻伝には、

上人終焉の期ちかづき給て勢観房念仏の安心年来御教誡にあづかるといへども、なお御

自筆に肝要の御所存、一ふであそばされて、給はりて、のちの御かたみにそなへ侍らんと申されたりければ、御筆をとめられる状に云とある。

これが一枚起請文であるが、如何に法然上人の信頼を得た人であったかがわかるし、法然上人もこの源智にこそ自己の所信を披歴するという心があったものとみてよい。

このように源智は上人付随の高弟であったし、上人の御恩を報じたいという一念から法然上人の御影を安置する知恩寺の創建となったもので、その寺名も長徳山功德院知恩寺と称している。

はじめは知恩寺と称していたのが、百万遍と呼ぶようになったのは、後醍醐天皇の元年（一一五五）に京都に疫病が流行ったときに、その寺の住職である善阿上人が、勅命によって百万遍の念仏をとなえたところ、京洛の疫病がたちまち止んだといわれている。

そこで天皇は念仏の功德の大なることを御感あり、百万遍の名を賜ったという。

この寺の御影堂の内外陣一ぱいにひろがる、大念珠があるのはそのためである。

この百万遍本山にも、法然上人の御廟がある。浄土宗の京都の本山としては、由緒が深く、源智の創建した寺としては、一ばん古いものである。

源智が亡くなったのは、暦仁元年（一二三八）の十二月十二日であるが、五十六歳で逝っている。そして源智は法然上人伝を一本まとめあげているが、昔は源智が見聞したことを弟子がまとめたといわれている。然も重細重大の梶村昇氏は、これは源智の著述であること指摘している。いずれにしても法然上人のあと、この源智の果たした役割は大きく、百万遍本山と、総本山知恩院の建立につくしたその功績は忘れることが出来ない。

▲浄土宗の古刹を訪ねて▼

——第二回——

三河大樹寺と多宝塔

愛知県岡崎の大樹寺は成道山松安院と号し、古来より浄土宗屈指の名刹である。

応仁元年（一四六七）、伊田野の合戦において松平親忠は、信濃の敵兵を破った。しかし多くの戦死者がでた。そこで親忠は文明七年（一四七五）、敵味方の戦死者を問わず精霊供養のため、弥陀三尊を祭り、その地方に道徳の聞え高い勢眷愚底和尚を招き、七日七夜の間、別時念仏を修し一寺を建立した。これが大樹寺の草創である。特に親忠・子息長親の帰依厚く、以後松平一門の菩提寺として発展した。

徳川家康の祖父、松平七代清康は大永三年（一五二三）僅か十三歳にして家督を継いだ。彼は武略に才、頗る勇敢であった。初代親氏以来、念願であった三河を始めて

征服し、享祿二年（一五二九）には尾張国まで侵入する勢いであった。清康は、この三河平定に当り、今日までの敵味方の戦霊菩提の祈願のために、自から一万疋の寄進をなし、さらに一門の面々からも寄進を募って、多宝塔建立を志ざした。多宝塔は天文四年（一五三五）五月に竣工された。しかし、清康のその喜びもつかのま、同年十二月、森山において、ふとしたことにより、家人阿部孫七郎のために無残にも刺し殺された。僅か二十五歳の短かい生涯であった。そんなことで、三河を統一するかに思われた松平家の勢力も、ここに挫折した。そのため子の広忠、孫の家康は、この後、哀れむべき時代を過ぎねばならなかった。

戦国の世にあつての榮枯盛衰は当然のことながら、生死においても常についてまわった。従つて現世安穩・後生善処を一心に願う心情は尚更のことである。しかし、そこには敵を受するという博愛精神がつかわれていたといえる。

親忠の建立した大樹寺の精神、清康の建立した多宝塔は、そうした心の深い信仰に基いたものといえよう。

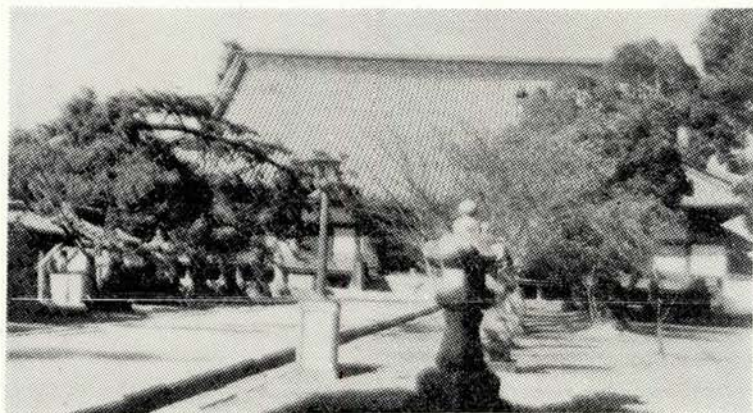
（佐々木洋之）

大樹寺の多宝塔

(松平清康建立)

大樹寺

現在の堂宇は安政年間の再建
本堂と書院の壁画、襖画は冷
泉為恭の作として有名。



「浄土」購読規定

一部 定価 九十円

会費一カ年金一、〇〇〇円

(送料不要)

浄土 六月号

昭和十年五月二十日

第三種郵便物認可

昭和四十六年五月二十五日印刷

昭和四十六年六月一日発行

定価 九十円

編集人 宮林 昭彦

発行人 佐藤 密雄

印刷人 関 二三男

印刷所 三幸社印刷所

東京都千代田区飯田橋一ノ十一ノ六

発行人 法然上人鑽仰会

電話東京二六二局五九四四番

振替東京八二一八七番

東京都港区芝公園十九号地の一

浄土宗務支所内

編集室 法然上人鑽仰会

昭和四十六年五月二十日 第一回 郵便物認可 (毎月一回一日発行)
昭和四十六年五月二十五日 第二回 郵便物認可 (毎月一回一日発行)
昭和四十六年六月一日 第三回 郵便物認可 (毎月一回一日発行)

“お盆の施本にご利用下さい”

『お ぼ ん』

おぼんのいわれ・おぼんの用語・法然上人のみ歌
これからの仏教行事・母の詩二題

新書版・表紙共12頁 価15円(100部以上12円)送料実費

《前田聰瑞・大野法道・中村弁康編》 本会発行

碩学 三の名著 『浄土宗読本』 覆刻版

価 1000 円 ㇲ 150 円

時代を越えて浄土宗の真髓を平易に説いた不朽の入門書を浄土開宗八百年を期して世に贈る。浄土信仰の意味と価値・法然上人の念仏の教えを日常生活に実現する仕方・仏教徒としての心得等々。この一冊あれば浄土宗は勿論仏教のすべてがよくわかる無類の名著。

浄土トラクト

新刊 『浄土宗のおつとめ』 村瀬秀雄著

B 6 判 本文16頁 価 50 円 百部以上 45 円 ㇲ 25 円

各々御用のむきは早目に本会へお申込み下さい。

東京都千代田区飯田橋1-11-6

発行所 法然上人鑽仰会

電話 (03) 262-5 9 4 4 番

浄土

第三十七卷

第六号

定価金九十円(送料六円)